

# さがそう、ぼくの道しるべ

## ～見通しをもったスケジュール支援～

社会福祉法人蓬萊会 こどもデイサービスひまわり  
保育士 岡本 遥

### 1 はじめに

こどもデイサービスひまわりは、総合支援学校に通う主に知的障害を伴う自閉症スペクトラムの診断を受けた小学校1年生から高校3年生までの児童・生徒を対象とした療育機関（放課後等デイサービス）である。施設環境については、小学部クラスおよび中・高等部クラスに分かれており、小学部クラスでは、小集団活動や身辺自立、対人コミュニケーションにおけるスキルの獲得を支援の柱に置いている。中・高等部クラスでは、軽作業課題・身辺活動・集団活動を実施し、社会性の構築を柱として、個別療育から集団療育へと成人期に向けた支援を行っている。両クラスともに将来を見据えた視点で、個々の発達段階に合わせて本人が見通しを持ちながら自信を持って過ごすことが出来るように支援を行っている。1年前、身体誘導で移動をしているA君と出会い「具体物を提示することで自ら予定を確認し、次の行動につなげていく支援ができるのではないか」という思いから支援を見直すこととなった。

### 2 A君について

- ・ A君（支援学校小学部4年生の男児）、父・母・本人の3人家族。
- ・ 重度知的障害、自閉症スペクトラム障害、レノックス・ガストー症候群。
- ・ てんかん発作の頻度は多く、毎日見られる（1回につき数秒～1分程度）。
- ・ 食事やトイレ、移動等のADLは介助や見守りが必要。
- ・ 文字や時計を読むことは難しく、絵カードや写真の理解も低い。
- ・ 発語は無く、手引きや行動にて自分の想いを表出する（拒否の際は顔を背ける等）。
- ・ 感覚刺激のある玩具、散歩、公園遊び、お菓子、賑やかな場所等が好き。
- ・ 本事業所は週2回（月・金）利用している（令和2年4月から利用開始）。その他の曜日は他事業所を利用している。
- ・ 最初に学んだ行動が固定化しやすい。そのため行動を変更する場合には時間を要する。
- ・ 特定の職員に対しての執着が強く、特に女性職員、児童の傍で過ごすことが多い。

### 3 利用開始当初の様子について

新しく通うこととなった本事業所に不慣れなことや、支援者、他児童を含む周囲の環境からの刺激の影響を受けやすく、てんかん発作が誘発されることが多かったため、常時見守りが必要な状況であった。当時、保護者は「安全に過ごして欲しい」という思いが強く、事業所としても本人の安心と安全を第一に考え、部屋から部屋へ移動を

する場面、食事の場面、トイレの場面等、様々な場面で手を繋いで行動（身体誘導）をしていた。日々過ごしていく中で、家庭では排便の際に、所定の場所から紙パンツを取る行動が見られた。この出来事を保護者が受診の際に医師に伝えたところ「具体物を頼りに活動出来始めているのではないか」と助言を受けたと教えてもらった。この情報を基に令和2年8月から、具体物を用いることで見通しを伝え、活動内容との一致を図ることが出来るように支援を開始する。とはいえこの頃は、見通しの理解とそれに伴う自発的な行動の全てに対して関わるのでは目標が高いように感じられ、まずは具体物に注目してもらうことを大切にして関わりたかった。そのため最初はトイレの場面に限定し、紙パンツを見せることで遊びのエリアからトイレへの誘導を促す等、移動の際には目の前で具体物を見せ誘導を行っていた。トランジションエリアとして所定の位置を定めることは難しく、身体誘導の色が濃かったが、支援を進めていくうちに紙パンツ＝トイレを示していることが理解出来るようになっていった。A君の成長した姿を目の当たりにしたことにより、保護者から「日常生活の中で何か出来ることが増えて欲しい」「特に食事面で自分のお腹がすいたタイミングで食事を摂取出来ないと癩癩を起こすため困っている」等の本人への想いが具体的になり、限定した場面の支援からファイル・靴を所定の位置に置く、食事の場面へと支援を展開していった。

その後、令和4年2月から具体物の支援と並行して写真カードを用いた支援を開始する。当時の支援者の「興味・関心の強いものであれば、カードに注目することが出来る」といった見立てに加え、医師から「視覚的なものやツールで予定を確認出来るようになると活動の見通しが持ちやすくなり、さらに安心して繋がるのでは」という助言を受けたことから、余暇エリアの押し入れ扉前に玩具の写真カード【図1】を提示し、写真カードに自発的に触れることで他者に想いを伝えるといった支援がスタートする。



#### 4 A君との出会い

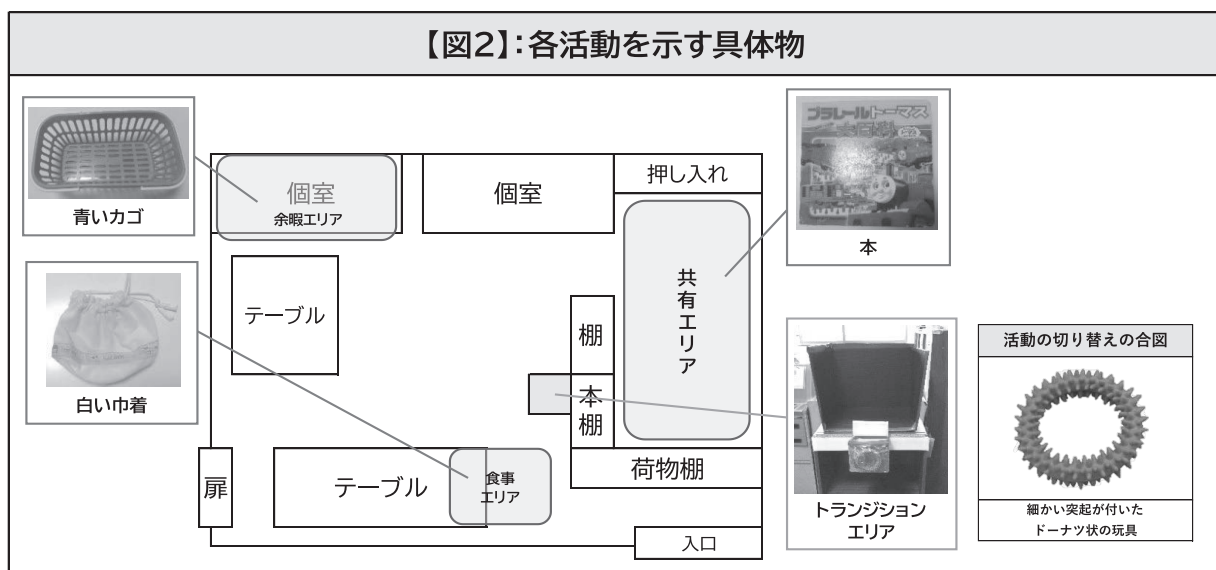
令和4年4月、小学部クラスに配属になった際に前述の支援を受け、過ごしているA君と出会った。まず私が出会って感じたことは、トランジションエリアが定まっていなかったためか身体誘導の色が濃く、具体物を見せてから手を引き誘導する職員もいれば、手を引いたのちに具体物を見せ誘導をかける職員もいる、といったように支援者

によって異なる対応をしていること、また具体物の支援と写真カードを用いた支援を並行して取り組んでいることを目の当たりにして、対応についても支援についても統一されていないことに疑問を感じた。特に出会ってから半年間、余暇の場面では遊びの内容を示す写真カードを余暇エリアの押し入れ扉前に貼り付け、本人の表出を見たが、写真カードを意識して自発的に操作する様子は見られなかった。反対に写真カードを外して余暇を提供するが、扉を開けたら玩具が出てくることを理解しているためか、写真カードの有無にかかわらず、扉前に座り込む様子が見られた。このことから、当時はまだ写真カードを理解して、適切に扱うことは難しく、具体物を使用して理解に繋げる必要があるのではないかと感じられた。

支援を考えるにあたって、どこまでを「自立」と呼ぶのかは子どもの発達に応じて異なることではある。しかし「自ら予定を確認して次の行動に移行する」ことが出来るようになることで少しでも自立した生活を送るということに繋がってほしいという思いから職員間でケース会議を行い、支援を見直す運びとなった。

## 5 情報の整理

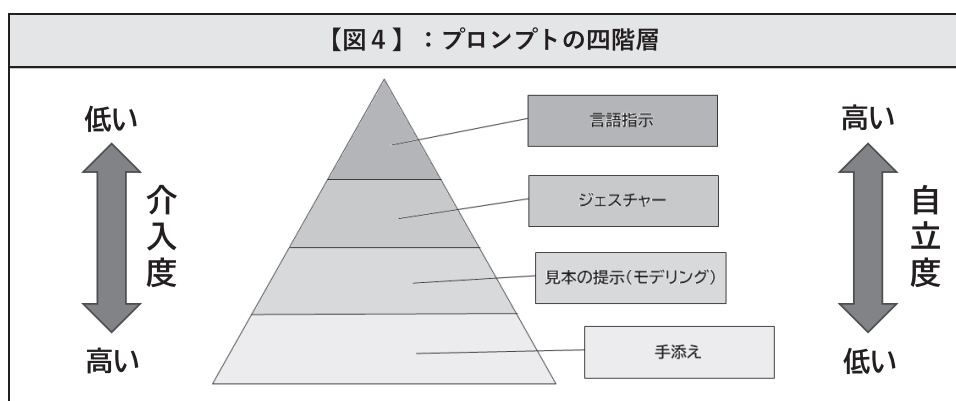
ケース会議では、構造化・支援シートを基に職員間でA君の情報を共有することで、統一して支援を行えるように話し合いを行った。移動の際には、人的な刺激が少しでも小さくなればと、行動や切り替えの起点となるトランジションエリア・各活動を示す具体物・移動した先の受け皿等の設定をした【図2】。活動の切り替えの合図としては、普段の様子から手をひらひら・ぶらぶらと動かすことやつま先でピョンピョン歩くといった感覚遊びが多く、手を握る力も弱いため、細かい突起が付いたドーナツ状の玩具に設定した。またこの頃から共有エリアに置いてある本を本棚に片付ける等、物を入れる動作が得意な様子であったことから、片付ける際はそれまでの活動で使用していたものを箱に入れることで、終わりの見通しを持つことが出来るように具体物を箱に入れる形とした【図3】。移動を促す際は「片付けるよ～」と言いながら活動の切り替えの合図となる具体物を見せる→片付ける→具体物を本人に渡すというように、一連の流れで次の行動に移ることが出来るように支援を統一した。





## 6 支援の具体化にあたって

前述したように、移動を促す際は一連の流れで次の行動に移ることが出来るように整理し、身体的プロンプトを用いて実際に支援を行っていった。プロンプトは手添え、見本の提示（モデリング）、ジェスチャー（指差し）、言語指示（声かけ）の4つがあり、【図4】に示すように手添えから言語指示へと上がっていくにつれ、自立度は高くなり介入度は低くなっていく。これまでのA君の様子から具体物の持つ意味とその適切な扱い方を教示するには、手添えでの介入が適当であろうという見立てのもと、身体的プロンプトを用いることで適切な行動が出来るように支援を進めていった。



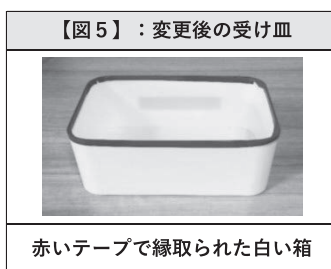
## 7 支援の実際

実際に具体物を提示しスケジュール支援をしていくことで、様々な変化が見えてきた。

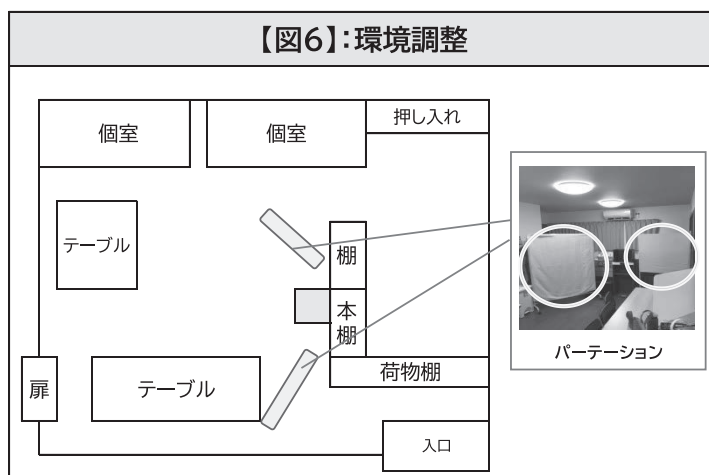
1つめは余暇を過ごす場所についてである。個室を余暇エリアとして設定し、知育玩具や楽器、感触の異なる玩具を1つの箱に入れて提供した。最初のうちは個室に入ると20分程度は楽しそうな様子で過ごすことが出来ていた。しかしトランジションエリアで余暇を示す具体物を確認した時点で、具体物である青いカゴを投げる・付近にある椅子やリモコンを投げるといった行動が次第に目立つようになっていった。A君は過去に「休憩(スヌーズレン・マッサージ)」として個室に入って過ごしていたが、A君にとって好ましい活動ではなく、やらされ感を拭えず行われなくなったという経緯がある。その時のマイナスなイメージがついていること、具体物と遊びの場所が繋

がっていないのではないかということから「入りたくない」という気持ちを表出してくれているように感じた。この間、個室で様々な玩具を提供したことでどのような玩具を好むのか知ることが出来た。A君は刺激の統制された静かな場所よりも賑やかな場所が好きなこともあり、これを機に個室で過ごすことをやめ、共有エリアに個室で使用していた玩具を提供することにした。共有エリアに玩具が加わったことで、他児童の傍に行って過ごしてみたり、個室と同じように玩具で遊んでみたりと、以前よりも長い時間（30分程度）余暇を過ごすことが出来るようになった。

2つめは移動した先での受け皿の形についてである。共有エリアでは本を本棚に入れる、食事エリアでは、白い巾着をおぼんの上に載せる、といったように様々な形であった。それぞれの具体物が異なるためなかなか定着に結び付かず、後ろから手添えにて行動を促されることが多かった。そのため各活動場所の移動先の受け皿を全て同じ箱（赤いテープで縁取られた白い箱に）に統一した【図5】。現在は統一したことによってどこに入れればいいのか明確になり、少しずつ理解が進んでいる様子である。



3つめは移動に拒否が見られた際の対応についてである。散歩が大好きであることや、特に夕方は他児童の動きに合わせて家に帰りたき気持ちが強くなることから玄関へと向かおうとする姿が見られ、示されている具体物を投げる・付近にある椅子を倒すといった行動が目立つようになっていった。その行動は「僕も外に行きたい」「帰りたき」という気持ちを表出しているのではないかと捉え、その時間帯は、玄関側・共有エリア側にパーテーションを立てることで、目に映る刺激の大きさや量を調整し、トランジションエリアに示された具体物に注目出来るよう環境調整を行った【図6】。また職員の「準備されたスケジュール通りに行動して欲しい」という意識をやめ「想いを受け止め、気持ちに寄り添う」ことに重きを置いて関わることで、本人が納得した上で行動することが出来るような関わりを目指した。今でも活動の拒否は見られるが、過剰な声かけによって注意を受けることや人によって行動を制限されることがなくなったため、気持ちを切り替えるまでの時間が短くなったように感じる。



## 8 A君の将来に向けて

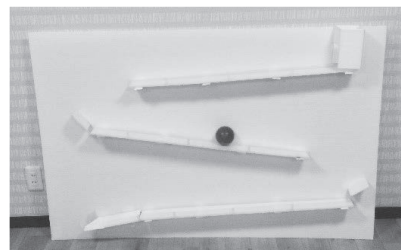
A君と出会ってから1年半が経過した。A君と向き合い過ぎていくなかで、職員の上に乗ってくる回数や、目を合わせてニコッと柔らかな表情で笑う等が以前よりも多くなったように感じる。それは職員が「想いを受け止め、気持ちに寄り添う」ことに重きを置いて関わった結果ではないだろうか。

現在A君は、具体物を確認した上で活動への拒否的な気持ちを表出する等、具体物と活動の理解が少しずつ繋がっている様子である。しかし、環境や人によって左右され、出来るときと出来ないときがある。前述したように「自ら予定を確認して次の行動に移行する」ことが出来るようになることで少しでも自立した生活を送ることに繋がってほしいという想いがあるため、その前段階として人や環境に左右されずに具体物に注目出来るようになって欲しいと考える。そのために今出来ることとして、靴を片付ける際に目の前のトレイ【図7】に注目出来るよう促すこと、ボールの動きを追って遊べるようプレイルームに手作りの知育玩具【図8】を設置すること等、様々な場面で具体物に注目する機会を増やすことで、示された物に注目出来るよう支援を行っている。

【図7】：靴を片付ける際のトレイ



【図8】：手作りの知育玩具



## 9 終わりに

A君の支援を進めていくうちに、自分の知識や経験の不足、統一した関わりやチームでの支援の重要性について身をもって実感することが出来た。

具体物の支援を始めるにあたって、何から始めたらいいいのか全くわからない状況であった。その中でも特に勉強になったと感じた出来事は、A君がトランジションエリアで、活動の切り替えの合図となるものを受け皿に入れても、何度も繰り返し合図となるものを手に取ろうとしたり、次の予定が示されている具体物を先に手に取ろうとしたりしたことである。私は1度箱に入れたら何度も手に取れないよう箱の形を変える方がいいのではないかなどの工夫をするべきだと考えていたが、まずは本人にとって理解しやすい適切なプロンプトを用い、適切な方法を教示することが大切であると知った。次の予定が示された具体物を先に取ろうとする→職員がその具体物を手で押さえ、合図となる具体物を先に入れるということを後ろから手を添えて実際の動作を

経験する、といったように身体的プロンプトを用いることで、適切な行動を伝え、支援していくことが大切であると身をもって学ぶことが出来た。少しずつではあるが、継続することで活動の切り替えの合図を箱に入れる→次の予定が示された具体物を手に取るという一連の流れが身に付きつつある様子である。

次に統一した関わり・支援についてである。A君のこれまでの経験から受け身の傾向が強く感じられるため、職員が1人でも手を引いて次の動作を示してしまうと、適切な動作を獲得するまでには至らず、誤学習からプロンプト依存へと繋がってしまう可能性もある。A君に限ったことではないが、職員1人ひとりがその場限りのことを思って関わるのではなく、どうすればその子の「自立」に向かって支援することが出来るのか、日々考えながら支援していくことが大切であるのではないだろうか。様々な視点から物事を見ることでより良い支援につなげていくことが出来るため、これからも疑問を持つことを止めず、子どもたちと向き合って支援していきたい。

## 10 謝辞

本報告を行うにあたりまして、チームでの支援に現在進行形で御協力頂いている当事業所職員、その他関係者の皆様、また私たちを信じて向き合ってくれたA君と保護者様に感謝を申し上げ、謝辞といたします。